

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.34
WINTER 2013



『狂言絵』より「仁王」

目次

● メッセージ

期待 身崎 壽 1

● 研究ノート

籬島と馬琴—軍記物語の読本化— 大高 洋司 2

「新・国文学論文目録データベース」について 伊藤 鉄也 4

見ぬ世の他者—秋成門人越智魚臣資料拾遺— 一戸 渉 6

抱谷文庫の歌舞伎台帳 光延 真哉 7

● トピックス

第37回国際日本文学研究集会 陳 捷 8

中国での学術会議報告2件 相田 満 9

EAJRS(日本資料専門家欧州協会)研究集会 太田あす香 10

平成25年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会 田中 大士 11

『HUMAN——知の森へのいざない』第5号 11

企画展示「渋沢敬三からのメッセージ」「周流する記録」を振り返る 高科 真紀 12

連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」 野網摩利子 13

大学共同利用機関シンポジウム2013「万物は流転する」 田中 大士 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 14

期待

身崎 壽（国文学研究資料館運営会議委員・北海道大学名誉教授）

日本学術会議の提言に端を発し、国文研が事業主体となって発足した「日本語の歴史的典籍のデータベース構築」事業に、私は大きな期待を寄せている。

古典籍を専門的に扱う研究者はもとより自国の歴史・文化に関心を持つ全ての国民に提供されるべき古典籍のデータベースを備えたデジタルアーカイブが未だに存在しないことは、まことに憂慮に堪えない。むろん、公文書館・博物館・図書館などが自己の収蔵する文書や文献を中心とするデータベースを公開している例は枚挙に暇がないが、日本の文化遺産たる、文学作品を含む歴史的典籍を網羅したものはないわけで、欧米各国や台湾などに比べてもいささか立ち遅れているという感は否めない。その点、今回の事業は『国書総目録』所載の全ての文献を対象とするというもので、とりわけ国文学の領域については画期的なものになると期待される。この事業を担うことを決めた館長はじめ国文研のスタッフの皆さんの英断に敬意を表したい。

ただ、予算措置が限定的であることに伴い、当面の事業は対象とする典籍の全冊画像データベースの作成に限られるという。予算規模からいえばこの方針はまずもって妥当といわなければならないし、いわゆるデジタルアーカイブとしての役割はいちおうそれで果たせるとも言えそうだが。現に、歴博などのデータベースも基本的には画像中心だ。

しかし、そこにとどまっていたら、国民の共有財産たる古典籍に対する広範な要求に応えることはできないのではなかろうか。古典籍を扱ってきた研究対象とする教師・研究者などの要求に応じつつ、さらに一般国民の知的欲求にも応えるためには、なんといってもテキストの閲覧と検索とを可能にするフルテキストの公開が必要不可欠だろう。上代文学を例にあげると、『万葉集』の信頼できる電子テキストといえば、山口大学の吉村誠氏の作成にかかる塙書房版にもとづくものと、大阪府立大学の村田右富実氏のおうふう版にもとづくものとの二件ぐらいのものだが、後者を収めるウェブページは閉鎖されて利用できない。その他の上代文献も、文学・史学諸方面で電子化に取り組んでいるが、バラバラで共同歩調をとるには至っていない。国文研の「大系本文データベース」も、登録条件を見るにやはり研究者向けで、広く一般国民に対して提供するものとはなっていない。いちばん網羅的に集めているのがひょっとすると外国のもの？（<http://etext.lib.virginia.edu/japanese/texts/chronology-premodern.html>）というのでは冗談にもならないだろう。

こうした状態に比べると、漢籍や仏典の方が、内外の諸研究機関の作成にかかるテキストデータベースが充実

しているように思われる。私の体験した一例をあげると、井伏鱒二が「犠牲」（1951年）という作品の中で使っている「穿身斧」ということばの出所がわからなくて長年あれこれ詮索していたが、SAT（大正新脩大藏経テキストデータベース）やCBETA（中華電子仏典協会）のテキストデータベースでその素性を突き止めることができた。

データベースの運営には、作成時はもとより維持管理にも多大な労力と資力とを必要とする。個人の努力や、期間の制約のある競争的資金に全面的に頼っているわけにはいかない。過去に公開されていた古典作品の本文データベースで、現在使えなくなっているものが少なくないのも、そうしたところに原因があるのではないか。そういえば、かつて〈校本万葉集データベース作成委員会〉が試行版を公開した同データベースは、主要古写本の画像を収録する画期的なものだが、上述のような理由からか、やはり事業がストップしているようだ。これなど、立ち腐れのままだしないで今回の事業で引き継ぐ方策はないものだろうか。

もちろん、テキスト化のばあい底本の選定が難しい。ここでまた『万葉集』を例にあげると、白文（原文）テキストについては、長い歴史を有する万葉文献学の成果の賜物といってよいだろう、どの通行テキストをとっても大きな問題は生じない。異同個所の校異を掲出することで解決できそうな気もする。問題は訳文（読みくだし文）で、こちらは万葉訓詁学のたゆみない努力にもかかわらず、定訓を得ることは至難だ。ただ、これについても、たとえば上代の学界で多く流通している「塙本」と「おうふう本」との本文・訳文の全面的な比較はすでに村田氏によって行われている。こうした成果を組み入れて行けば、こちらもある程度打開できるのではないだろうか。

当面の課題である画像データベースにしても、たんに閲覧可能にするだけでなく、「クリアテキスト付きPDF」などによって検索機能を付加すれば、大きな貢献が期待できる。字形・字体・書体が大きくかわるこの問題は、とくに漢字のみで書かれている『万葉集』にあってはハードルが高そうだが、国文研でははやくからこうした方向を模索して来て、技術の蓄積もあるはずだ。

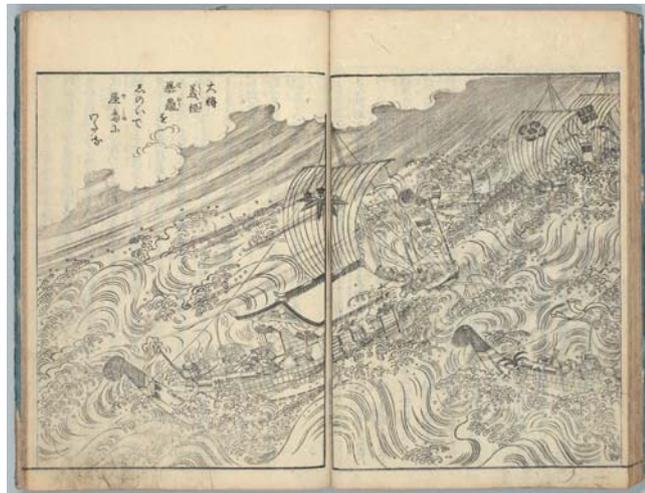
設立の趣旨からいって、国文研はあくまでも大学などの研究機関にかかわる研究者の要求に応えるのが本務だろうが、ここはあえて一步を踏み出して、広範な国民の期待に応える、いちだんと進化したデジタルアーカイブの構築をめざしてほしいものだ。

籬島と馬琴—軍記物語の読本化—

大高 洋司（国文学研究資料館教授）



図版1：巻之一表紙



図版2：巻之五 40ウ・41オ挿絵

軍記物語の古典として知られる『源平盛衰記』（48巻、以下『盛衰記』と略称）は、江戸時代の文芸にも多くの影響をもたらしたが、このほど、19世紀前半に流行した〈（後期）読本〉と呼ばれる長編娯楽小説の『盛衰記』受容について検討する機会があった。

対象に選んだのは、『源平盛衰記図会』（以下『図会』と略称）である。目録題・内題は「げんへいせいすいきづゑ」。寛政12年（1800）正月、二鳩堂刊、大本6巻6冊。秋里籬島著、法橋西村中和・奥文鳴源真章画【図版1：巻之一表紙、図版2：巻之五40ウ・41オ挿絵、図版3：巻之六末尾】⁽¹⁾。本作は、〈名所図会〉シリーズの著者として知られる籬島が、『盛衰記』（依拠テキストは近世初期刊行の「無刊記整版本」25冊）を6巻に縮約した絵入り本で、山東京伝・曲亭馬琴を中心作者とする〈稗史もの〉読本の形成期と同じ頃に出版された〈図会もの〉読本の第一作である。従来「創作性」に欠けるとされてきた⁽²⁾が、やや詳細に読み直した結果、異なる観点からもう少し積極的に評価しても良いのではないかと考えるようになった。この点について、別にまとめた拙論⁽³⁾の要点を略述するところから始めたい。

『図会』には、巻ごと（各巻50数丁）

に「全体を俯瞰するかたちの名所図会風の挿絵」（『日本古典文学大辞典』、横山邦治氏）が20葉近く含まれている。それらの多くは、寛文5年（1665）刊及び元禄14年（1701）刊の『盛衰記』絵入整版本の挿絵を共々粉本とした可能性が高いが、中にごく少数、『盛衰記』・『平家物語』等に取材した浄瑠璃・歌舞伎の演出を想起させるものがある。しかし、これらが浄瑠璃・歌舞伎を意識して描かれたとしても、『図会』の本文そのものが当世風に和らげられているわけではなく、それぞれの場面においてできる限り原典の本文に忠実に「引き写」（横山氏）されている。「引き写」された原拠の内訳は、次のとおりである。

巻之一 盛衰記巻第一～十二 平家巻第一「鱸」・「鹿谷」・「鶴川合戦」・「御輿振」、巻第二「西光被斬」・「少将乞請」
 巻之二 盛衰記巻第十一・十二～十九 平家巻第四「橋合戦」
 巻之三 盛衰記巻第二十～二十八（ただし巻第二十七はすべて省略）
 巻之四 盛衰記巻第二十九～三十七 平家巻第九「一二の懸」・「二度の懸」
 巻之五 盛衰記巻第三十七～四十三 平家巻第十一「那須与一」・「弓流」・「志度合戦」・「遠矢」・「先帝御入水」・「能登殿最後」

巻之六 盛衰記巻第四十四～四十八 義経記巻第五～八（巻第四末尾含む）

『盛衰記』ばかりでなく、『平家物語』・『義経記』（いずれも流布本）からも「引き写」されているが、『平家』は大部分な『盛衰記』を「引き写」す際に軌道修正の指針としたか。『義経記』については後に触れたい。

「引き写し」箇所を特定する作業を続けていくうちに、「引き写」す本文の選択の仕方、「引き写」された本文に見える表現の小さな改竄に加え、『図会』の所々に附された人物評価コメント（それほど多くはない）から、籬島の編集意図が少しずつ見えるようになった。基本方針は、『盛衰記』の主題を、平家方に対する源氏方の権力確立に向けての闘争として捉えること、である。その先鋒源義経は、登場した時から「張子房を左にし諸葛亮を右にしたる人品」（巻之三「義経来頼朝陣前誅大場已下」28オ、籬島により付加された表現）とされている。「諸葛亮」は言うまでもなく蜀の劉備の臣であるが、一方の「張子房」は漢の高祖の創業を助けた張良。義経はまた、同じく漢の韓信にも例えられ、その高評価は陪臣佐藤継信・忠信兄弟にも及ぶ。『図会』巻之六の後半部を『義経記』からの「引き写し」にあて、生存説にまで

言及しているのもそのためである。これに対して、『盛衰記』（また『平家』）後半部の、敗者平家に対する仏教的救済を描いた章段は、積極的には『図会』に「引き写」されず、加えて『図会』には珍しく、原典本文の改竄が目立つ。

このように、『源平盛衰記図会』の原典受容は、「諸行無常」「盛者必衰」の主題を十分に受け継がず、主として頼朝以降の武家（源氏）政権につながる、権力交代に伴うドラマに着目する方向で行われているが、原典を「引き写」す著者の態度は、それぞれの場面においてできる限り原文に忠実であろうとしている。先に触れたように歌舞伎・浄瑠璃的「創作」性が、挿絵の一部に止まることからしても、本作は、時代に即した『盛衰記』入門書として当代に受け入れられたのではなかろうか。

これに対し、本作と同時期以降、江戸を中心に人気を博した〈稗史もの〉読本は、工夫を重ねた構成の型の中に演劇と中国小説（特に前者）を取り込むことで「創作」性を高めていく（挿絵についても、〈稗史もの〉が、俯瞰よりも中景に複数名の人物を描くことを基本とするようになるのは、舞台上の演出を想起させる）。中において、曲亭馬琴『俊寛僧都嶋物語』（文化5年〈1808〉刊）は、『盛衰記』及び『長門本平家物語』・『義経記』を踏まえた初期の〈史伝もの〉読本と下位分類される作である⁽⁴⁾が、馬琴は、『嶋物語』冒頭に張良の秦始皇帝暗殺未遂事件（『通俗漢楚軍談』巻之一等）に依拠したエピソード（相手は清盛）を設けて、逃れた義経（牛若）を俊寛と邂逅させ、俊寛に「天の生せる大將軍」と称揚させている。また後半では、中村三近子『謡曲画誌』（享保20年〈1735〉刊）巻九「俊寛」に載る、俊寛が流された鬼界島から生還したという説を根拠に、鬼一法眼（兵法書「虎の巻」を所持。浄瑠璃『鬼一法眼三略巻』（享保16年〈1731〉初演）との典拠関係が指摘できる）実は俊寛として全体の山場を構成するが、ここでも義経が張良に例えられている。『嶋物語』の前・後半を通じて義経に張良（暗殺失敗→

黄石公からの六韜三略の伝授）のイメージを重ね合わせたのは、『謡曲画誌』巻五「張良」にそのように記されているのを踏まえたためであろう。

馬琴は、どこから『謡曲画誌』にたどり着いたのだろうか。『源平盛衰記図会』の広告【図版3】に載る「謡訓蒙図会」の書名が、改めて気にかかる。同じ「二鳩堂」から享和2年（1802）に出されたこの本は、実は『謡曲画誌』の後修改題本なのである。馬琴は「源平盛衰記 四十九巻 合巻廿六」（『曲亭蔵書目録』）を所蔵しているが、『嶋物語』の執筆にあたって先行作として参照した『源平盛衰記図会』が、馬琴と『謡曲画誌』を仲介した可能性も、十分にあり得ると思う。

馬琴自身は、この後さらに、「演劇」の下風に立つ創作から、自身の理想とする〈稗史〉へと歩を進めていくが、文学史的には、籙島の〈図会もの〉は、後期読本様式の形成期にあつて、『盛衰記』などの原典と、〈稗史もの〉読本のうち馬琴を中心とする〈史伝もの〉を仲介する役割を果たしている。馬琴も『源平盛衰記図会』の刊行された寛政末～享和頃（1800年前後）に、軍

記物語や中国の軍談のあらすじを紹介する絵本類（ただし中本サイズ）を手がけているが、こうした仕事は、〈稗史もの〉読本につながる、長編模索のトレーニングを兼ねていたのではないかと考えている。

注1 初印本（26.6×18.8センチ）は浅葱色地表紙、笹竜胆（源氏家紋）と胡蝶（平氏家紋）の型押文様（國學院大學図書館所蔵：貴3800-3805、大高架蔵本）。対して図版1～3に掲載した国文学研究資料館所蔵本（ナ4-944-1～6）は、刊記等も初印本と全く変わらないが、初印本巻之四で欠落した本文2丁分（18・19丁）を補った後修再印本で、寸法がやや小さく（25.7×17.6センチ）、表紙の地色と文様（縹色、花文〈梅・椿・蕨など型押〉）も異なる。

注2 横山邦治『読本の研究 江戸と上方』第一章第四節「図会ものの諸相」、風間書房、1974。

注3 大高洋司「秋里籙島『源平盛衰記図会』一軍記物語「読本」化の一過程―」、「國學院雑誌 特集 資料ががたる物語、記録からよむ物語」114-11、2013・11。

注4 このうち『長門本平家物語』との関係については、拙稿「曲亭馬琴と平家物語―長門本享受への一視角―」（松尾葦江編『海王宮―壇之浦と平家物語』所収、三弥井書店、2005）において論じた。



図版3：巻之六末尾（広告・画工名・刊記）

「新・国文学論文目録データベース」について

伊藤 鉄也（国文学研究資料館教授）

国文学研究資料館が公開している「国文学論文目録データベース」(<http://base1.nijl.ac.jp/~ronbun>)は、研究者や学生にとっては必要不可欠の論文検索ツールとなっています。日本文学や日本語学関係の研究状況の調査や、研究論文を執筆するにあたっては、これなくしては前に進めないというのが現状です。

現在は、明治21年から平成23年までに一般に公表された、国文学関係の論文（約530,000件）が検索できます。この「国文学論文目録データベース」が、平成26年早々に装いも新たな形で公開されることになりました。これまでのデータ作成から公開までの流れを再検討し、システム部分から作り直したものです。入口となるページのデザインはもとより、項目の並びもわかりやすくなっています。

これまでにお寄せいただいたご意見を反映させたことはもちろんのこと、データベースの基本ともいえる基礎データの作成過程も見直しました。これにより、論文情報を公開するスピー

ドが飛躍的に速くなることが期待されます。

国文学研究資料館内部での作業工程を一新することにより、さらなる利用者の要求に応えられるデータベースに育てていく予定です。その新システムに対応すべく、担当部署ではハイピッチでデータを作成し、その確認を進めています。

まずは、遡及分を1件でも多く公開し、停滞していた過年度分を1日も早く提供できるように心掛けて取り組んでいます。この改修に伴い、確認などが不十分なままのデータが検索結果として表示されることがあるかもしれません。これは、ご指摘をいただく中で、徐々に補訂を加え、より正確な情報に仕上げていきたいと思えます。

長い間、『国文学年鑑』のスタイルに縛られていた部分が、ウェブ版の随所にありました。これは、データを作成する現場の問題でもありました。その拘束から解放されることを強く意識して、新たなシステムでウェブ版に取り組んで行くことになったのです。

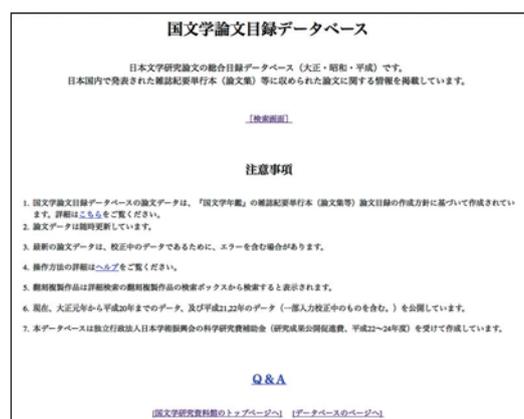
そこでの割り切りと微調整に、今しばらくの時間がかかると考えられます。利用者の皆様からのご意見をいただきながら、正確さと即時性を兼ね備えたデータベースの公開を目指して行きます。

なお、昭和16年から昭和52年まで『国文学研究文献目録』として、それ以降は『国文学年鑑』として長く利用されてきた書籍版は、平成17年度版（2007.10）で休刊となりました。現在は研究論文の情報のすべてを、国文学研究資料館のホームページから公開しているウェブ版「国文学論文目録データベース」に完全に移行しています。

最近4年間のアクセス状況を検索のべ数で見ると、次のような動向となっています。

多少の出入りはあるものの、春と秋をピークに、例年ほぼ同じペースで利用されています。これは、大学の授業や論文執筆の時期が反映したものだと思われる。

大学の文学部が姿を変え、さらには少子化傾向が進む中で、この「国文学



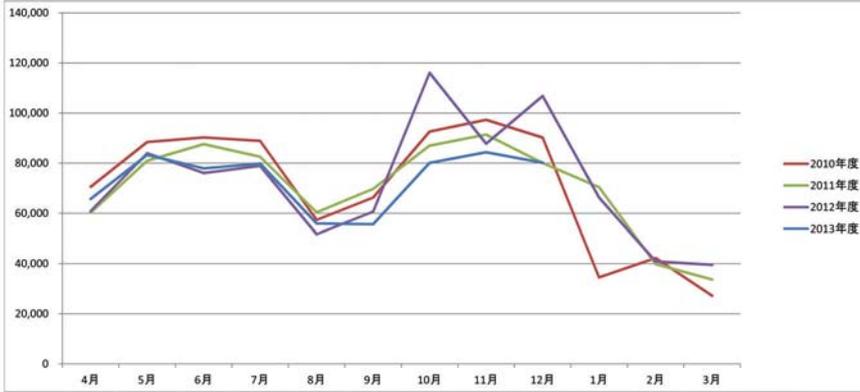
旧トップページ



新トップページ

国文学論文目録データベースアクセス状況
(検索のべ数)

2014年1月7日



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2010年度	70,563	88,455	90,283	88,938	57,417	66,307	92,646	97,351	90,251	34,556	42,230	27,157	846,154
2011年度	60,336	80,992	87,609	82,580	60,388	69,733	87,028	91,420	80,106	70,426	39,824	33,686	844,128
2012年度	60,928	83,940	76,101	78,968	51,736	60,663	116,077	87,807	106,827	66,281	40,944	39,537	869,809
2013年度	65,746	83,325	77,955	79,831	55,972	55,679	80,165	84,376	80,175				663,224

2011年2月第8期情報システム運用開始

論文目録データベース」にはその影響が利用者数にあまり及んでいないように思われます。これが意味することも含めて、本データベースの利便さと正確さを求めながら、さらなる改良を続けていきたいと思ひます。

今後とも、変わらぬご理解とご支援及びご教示を、どうぞよろしくお願ひいたします。

国文学論文目録DB発行年別更新件数



更新件数	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	
更新件数	2,221	1,889	1,890	1,881	1,892	1,893	1,894	1,895	1,896	1,897	1,898	1,899	1,900	1,901	1,902	1,903	1,904	1,905	1,906	1,907	1,908	1,909	1,910	
公開件数	29	59	0	0	0	0	12	145	527	157	188	206	184	175	184	148	140	59	117	95	81	85	118	
大正期発行	4,450																							
発表年	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925									
公開件数	321	184	208	250	368	393	284	371	275	216	181	308	311	418	515									
昭和前期発行(昭和)	16,997																							
発表年	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945				
公開件数	572	750	451	385	402	480	618	884	1,106	888	1,067	1,207	1,288	1,072	1,238	1,095	1,543	1,163	138	79				
昭和後期発行(昭和)	215,228																							
発表年	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969
公開件数	341	500	532	707	1,032	1,260	1,579	1,687	1,808	2,019	2,388	2,700	2,827	3,281	3,463	3,477	3,426	4,091	4,177	4,792	5,137	5,542	4,900	5,088
平成期発行	1970	1971	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988													
公開件数	6,938	7,531	7,894	7,853	8,440	8,552	10,610	9,588	10,483	10,724	10,578													
平成期発行	254,380																							
発表年	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	
公開件数	10,950	10,793	11,470	12,081	13,059	12,813	13,053	12,874	12,897	12,855	12,256	12,476	12,777	12,467	12,879	13,195	13,531	13,108	14,606	15,041	13,181	12,828	11,841	
合計	533,284	(20131205現在)																						

国文学論文目録データベース 発行年別更新件数

見ぬ世の他者—秋成門人越智魚臣資料拾遺—

第6回日本古典文学学術賞受賞者 一戸 渉（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫准教授）

古典籍との出会いとは、それを著し・写し・所有していた人間との時空を隔てた邂逅である。とはいえ、見ぬ世の人を友とするのは『徒然草』の著者なればこそよくなしうること、その響みに倣い、おいそれと「友」と呼べるほど、私などは古人との魂の交感が果たしているか甚だ心許ない。さしずめ「見ぬ世の友」ならぬ「見ぬ世の他者」とでも呼ぶのが穏当か。ただその一方、書物を介して彼・彼女らと偶然にも出会ってしまったとき、そこに後人としての責任のごときものが立ち現れてくるように感じる。拙著『上田秋成の時代—上方和学研究—』（ペリかん社刊）は、その応答責任を果たそうと試みた結果の産物でもある。

拙著第三部第三章で取り上げた越智魚臣も、偶然出会ってしまった「見ぬ世の他者」の一人であった。彼は秋成の弟子でありながら、師の論敵である本居宣長にも様々に接触し、一方で『やいかま』という宣長罵倒書を著したかと思えば、その直後に没した宣長のために追悼歌を詠むなど、何とも融通無碍な人物であったが、著作として残るのは上記の『やいかま』一点のみ。従来、彼を主題とする論文が皆無であったのも当然であろう。拙著では、著作の乏しいこの人物を論じるにあたり、彼が書写・校合した書物を、管見の限り列挙して検討したが、不思議なことに、拙著刊行後から相次いで新たな関連資料を知る機会を得た。魚臣について今後改めて書く機会もそうあるまいから、この場をお借りしてそれらを列挙し、更なる資料出現の呼び水となることを期待したい。

○寛政六年四月、五月、十二月、賀茂真淵『国意考』を書写校合する。

長崎県立長崎図書館伊勢宮文庫蔵本。奥書によれば寛政六年四月二十八日に魚臣が書写、同年五月中旬及び十二月頃に林鮎主所蔵本に基づき二度の校訂を行ったもの。大庭卓也他「長崎県立長崎図書館所蔵「伊勢宮文庫」目録」（『文献探究の会』第四二号、二〇〇四）及び高松亮太「林鮎主年譜稿（上）—明和から寛政まで—」（『上方文藝研究』第十号、二〇一三）参照。

○寛政六年五月、建部綾足『すずみぐさ』を書写校合する。

宮内庁書陵部蔵本（国文研マイクロフィルム二〇 - 四五六 - 二）。奥書「寛政六年乃五月に写しをはりてよみかうかへつ うましねの田中の里人直躬しるす」。奥野美友紀「『すずみぐさ』の諸本」（平成二十五年度日本近世文学会春季大会発表資料）参照。

○寛政七年五月、『東遊歌図・神楽歌・催馬楽』の真淵校訂本を書写する。

京都大学附属図書館蔵『校本風俗歌神楽歌催馬楽』（四 - 二九 - ア - 一）。東遊歌図・神楽歌・催馬楽の三点を合写したもので城戸千楯並びに隈川春雄旧蔵本。以下に示す奥書及び筆跡から判断して、該書は奈須守彦筆写本であり、そこへ更に千楯が興田吉従本及び賀茂季鷹本を以て校訂したものと思しい。また久老蔵本が弟正均を通じて京の林鮎主へ齎され、それが魚臣を介して京の鈴門へと伝播してゆく書物の流通経路が知られる。東遊歌図奥書「右風俗歌古本我兄荒木田神主久老人所秘蔵本也/天明二壬寅年冬十二月二日書写畢 弟度会正均珍藏/天明五乙巳歳春二月三日写終 平安 源鮎主 在判/寛政乙卯夏五月 浦宮 埜公英写之 越智直躬誌/（以下朱筆）享和三年亥春二月十五日夜以加茂季鷹先生本校合畢_{イ本}城戸千楯（朱筆以上）/同年夏四月廿六日若州興田氏源吉従主本をもて校合をへぬ_{吉本}/右吉従本ハ賀茂真淵自筆の蔵本也吾鈴之屋大人荒木田尚賢小篠世美源吉従ト写シ伝ヘタル也」。東遊歌奥書「右神楽歌古本甚珍書也以先師賀茂県主蔵本本居宣長書写之 門生 松尾洗利再書校合畢/安永九庚子年十一月 荒木田神主久老在判/天明二年壬寅歳九月七日書写校合度会神主正均在判/天明五乙巳歳交鐘中句写之 源鮎主在判/寛政乙卯夏五月備田中政徳写之 平安越智直躬/（以下朱書）享和三年亥閏正月梁塵愚案抄之以古本一校畢 千楯 愚/同年三月十七夜以加茂先生本校合畢 イ本（朱書以上）」。催馬楽奥書「右催馬楽古本者古翁加茂県主所蔵秘本也/寛政十一年四月丙申/越直身主以蔵書写畢/平安宮人奈須守彦/（以下朱筆）享和三年亥二月十四日 以愚案抄古本一校畢 千楯 愚/同三月廿七日加茂季鷹先生之本ヲモテ校合畢 イトアルモノコレナリ/加茂本奥書云天治二年春三月付家説移野の口伝已秘蔵也不可有外見歟/鈴歟 河 我家 大宮 奥山^{以上呂} 澤田河 我駒 貫河 鶏鳴 陰名^{以上} 件歌或絶後及数十年或依不伝家説不書也（以上朱筆）」。

○寛政十二年正月五日、建部綾足『折々草』を書写する。

個人蔵。奥書に「従寛政己未十二月廿九日至庚申正月五日抄写功成」とあり、続く署名部分が塗抹されているが、筆蹟及び印記等から魚臣筆と見てよい。奥書の後に和文家としての綾足を讃えた魚臣識語が続き、その中に「つぬかのひつかかされしを」とあるのは、同じく綾足の『片歌かしの下葉』の角鹿子実蔵本を魚臣が書写しており、彼の通称は「秀」であることから（拙著二五〇頁）、後年馬琴と繁く交渉を持つ角鹿子実のことと見てよい。すなわち角鹿子実蔵本からの転写本である。

抱谷文庫の歌舞伎台帳

第6回日本古典文学学術賞受賞者 光延 真哉（東京女子大学現代教養学部准教授）

抱谷文庫は埼玉大学の名誉教授で、人形浄瑠璃や歌舞伎の研究で知られた故大久保忠国氏のコレクションである。文庫は氏の没後古書市場に出されることになった^{*1}が、幸いにしてそれ以前に国文学研究資料館が悉皆調査を行っており、同館所蔵のマイクロフィルムおよび紙焼写真にその画像が収められている。とりわけ、一点ものであることの多い歌舞伎の写本台帳を、影印の形であれ見られることは、歌舞伎研究に益するところ大きく、拙著『江戸歌舞伎作者の研究 金井三笑から鶴屋南北へ』（笠間書院、2012年）でもその恩恵に大いに与った。この小稿では、現在資料館のフィルムで閲覧できる写本の歌舞伎台帳について、その主立ったところを紹介してみたい。

40点余りの台帳のうち、確認しうる限り初演の年時の最も古いものは、宝暦9年（1759）12月、大坂中の芝居（嵐吉三郎座）で上演された『仮名草子国性爺笑録』で、それに次ぐのが安永9年（1780）7月、大坂角の芝居（芳沢いろは座）の『南詠 恋抄書』となる。前者は貸本用の台帳、後者は横本仕立てで裏表紙に「本主／奈河保治郎／求之（所持）」とある。いずれも後世の筆写で、他にも写本が存する作品である。現存唯一の台帳として古いところが、天明7年（1787）12月、大坂角の芝居（中山久吉座）の『大都会見取曾我』であるが、これについては『演劇研究会会報』第39号（2013年5月）所収の拙論をご参照頂きたい。

抱谷文庫の特徴の一つは、大久保氏自身が早く『近世文藝』第2号（1955年10月）の「未翻刻南北作歌舞伎脚本四種解題」で架蔵の『盤話水滸伝』、『娑花江戸伊達染』、『解脱衣楓累』、『菊月千種の夕映』の4点を紹介した^{*2}ように、鶴屋南北関係の貴重な台帳を多く含むという点である。この4作に加え『謎帯一寸徳兵衛』や、写本ではな

いが南北の三回忌に配られた刷り物『極らくのつらね』が三一書房の『鶴屋南北全集』の底本となった^{*3}。その他、南北の出世作『天竺徳兵衛 韓 嘶』の再演である『波 枕 韓 闇書』の台帳が鶴飼伴子氏によって翻刻紹介され^{*4}、また、拙著でも初期の南北が携わった『けいせい井堤 藩』の台帳について触れた。

南北と並び称せられる河竹黙阿弥の関係では、『皿屋 鋪 化粧 姿 視』、『鶴千歳曾我門松』、『富治三升 扇 曾我』、『筑紫巷談 浪 白 縫』、『雨 催 月 笠 森』、『恋闇 鶴 飼 療』の台帳があることも注目されよう。いずれも幕内系統の台帳で、特に『恋闇 鶴 飼 療』には「黙阿弥蔵書印」も押されている。その他、珍しいところでは、『歌舞伎台帳集成』第28巻（勉誠社、1993年）収録の『猿若』、『新発意太鼓』と同一系統の写本である『江戸三芝居ワキ狂言記』や、万延元年（1860）正月、中村座で上演された、狂言堂左交こと三代目桜田治助作の『金瓶梅曾我松賜』の舞台図といったものなどもある。

現在散逸してしまった抱谷文庫の写本台帳であるが、中には原本の所在が明らかになっているものもある。前掲『けいせい井堤 藩』は早稲田大学演劇博物館の所蔵となり、図版で示した『為朝 射 親 眺』（寛政11年〈1799〉11月、中村座）の貸本系統の10冊の台帳は、運良く稿者が手に入れることができた。拙著で採り上げた『春世界艶麗曾我』二番目後日の台帳に貼り紙訂正が多く確認できたように、台帳の調査では原本を直接見られるに越したことはない。これら抱谷文庫の台帳の原本が今どこに存在するのか、その情報提供をこの場を借りてお願いするとともに、広く研究者の利用に供するため、目録類の作成の必要性を感じている。

*1 薄物正本や役者評判記、芝居番付、草双紙等、その一部分は明治大学図書館が購入、故水野稔氏のコレクション等と合せ、「江戸文藝文庫」として同図書館に収められている。原道生氏「『江戸文藝文庫』蔵書解題（六）○抱谷文庫旧蔵書（その一）―せりふ正本類」（『図書の譜 一明治大学図書館紀要一』第11号、2007年3月）には、せりふ正本類49点の目録が載る。

*2 大久保氏は『未刊江戸文学資料』1（1959年11月）・2（1960年1月）において『解脱衣楓累』の翻刻を紹介、また、『近世文藝』第8号（1962年11月）の「鶴屋南北作『娑花江戸伊達染』補説」では新たに入手した『娑花江戸伊達染』の端本について解説している。

*3 全集の底本となったもの以外にも『隅田川花御所染』の二番目序幕の台帳がある。なお、『極らくのつらね』は現在明治大学図書館が所蔵。

*4 『四代目鶴屋南北論 一悪人劇の系譜と趣向を中心に一』（風間書房、2005年）。



『為朝射親眺』台帳（架蔵）

第 37 回国際日本文学研究集会

平成 25 年 11 月 30 日（土）～12 月 1 日（日）、第 37 回国際日本文学研究集会が国文学研究資料館において開催されました。二日間に渡る研究集会において、国内外の応募より選出された 11 名の研究発表、4 名のショートセッション発表、6 名のポスターセッション発表の、計 21 名による発表がなされました。また、二日目の午後には、「テキスト・ジェンダー・文体—日本文学が翻訳されるとき—」と題するシンポジウムが行われ、中川成美（立命館大学教授）・呉佩珍（台湾政治大学助理教授）・キアラ・ルナ・ギデーニ（Chiara Luna Ghidini・イタリア・ナポリ東洋大学講師）および小嶋菜温子（立教大学教授）の四人のパネラーは「翻訳」という視点から、日本文学のテキスト・ジェンダー・文体をめぐるさまざまな問題を大いに語って頂きました。

国際日本文学研究集会は、国文学研究資料館の主催によるもので、日本文学研究の国際的な発展を目的とし、昭和 52 年から毎年秋に開催されている長い歴史を有するイベントです。第 37 回の今年は、若手の研究者や外国人研究者がより参加しやすくするために、研究発表・ショートセッション発表およびポスターセッション発表の三つのセッションにおいては、テーマを設定しないようになり、また、ポスターセッション発表においては、英語による発表も可能にしました。国内外から 133 名の参加者が集まりました。その中には海外及び国内に在住の 10 ヶ国の外国人研究者計 39 人が含まれています。発表者は集会のテーマをめぐるさまざまな角度から研究成果を発表し、質疑応答も活発に行われ、出席者に多くの刺激を与えました。

第 37 回国際日本文学研究集会における研究発表の全文及びショートセッション発表の要旨、ポスターセッションのテーマを収録した会議録は来年 3 月に国文学研究資料館より出版される予定で、会議プログラム及び要旨集（日本語・英語）の PDF 版は、国文学研究資料館の web にて公開されておりますので、御覧いただければ幸いです。

(http://www.nijl.ac.jp/pages/event/symposium/2013/japanese_literature.html)

なお、第 38 回国際日本文学研究集会は平成 26 年 11 月 29 日（土）～30 日（日）に開催される予定です。今年と同様、研究発表・ショートセッション発表およびポスターセッション発表の三つのセッションにおいてはテーマを設定しないで、ポスターセッション発表は英語でも可能です。30 日午後に開催予定のシンポジウムのテーマは「図像のなかの日本文学」です。多数のご参加をお待ちしております。平成 26 年 4 月下旬から研究発表を募集しますので、詳しいことは来年 4 月に当館のホームページを御覧いただくよう、お願い申し上げます。

（陳 捷）



研究発表



ショートセッション



ポスターセッション



シンポジウム

中国での学術会議報告 2 件—和漢比較文学会第 6 回特別例会・「日中韓シンポジウム 東アジアにおける人と自然の相互作用の多元的アプローチ」—

平成 25 年 8 月末と 9 月初めに中国で開催された 2 つのシンポジウムについて報告いたします。前者は、和漢比較文学会主催の第 6 回特別例会で、平成 25 年 8 月 29 日から 9 月 1 日にかけて開催されました。本会は和漢比較文学会が毎年恒例で開催する海外例会で、台湾台北市の国立台北大学と中国陝西省長安市の西北大学とで毎年交互に開かれるものです。本年の例会は国際交流基金の支援を受けて、西安賓館（西安市碑林区長安北路 58 号）を会場に前夜祭と終了後のエクスカージョン（実地踏査）を挟んだ 4 日間に及ぶものでした。その内、研究発表は 8 月 30・31 日の 2 日間にわたり、日本国内で開かれる例大会での総発表件数にも匹敵する 19 本の研究発表がなされました。中国出身の日本文学研究者は、せっかく日本文学の学位を取得して帰国しても、日頃は語学を担当することが多く、このような最先端の文学研究にふれ、発表できる会議は本当にありがたいと、感謝の声が多く寄せられました。そうした中で、総合研究大学院大学 OB や在学学生、国文学研究資料館教員による次の発表も行われました。

○陳可冉（総合研大 OB・四川外国語大）「異彩の伶人—林鷺峰の弟子狷高庸について—」

○黄昱（総合研究大学院大学在学学生）「漢訳される『徒然草』—近世期兼好伝との関わり—」

○王曉瑞（総合研究大学院大学在学学生）「正岡子規の好尚—橘曙覧歌の読まれ方から考える—」

○山下則子（本館教授）「歌舞伎『お染久松色読販（うきなのよみうり）』と読本—『今古奇観』第 29 話の影響—」

○相田満（本館准教授）「騎馬武者像再考—西川祐信『絵本武者備考』を起点に観相の視点から考える—」

もう一つの国際会議は、9 月 4 日に中国福建省泉州市の国立華僑大学を会場に、日本 8 本・韓国 1 本・中国 7 本の計 16 本の研究発表が行われたシンポジウムです。台湾などでは、3 国以上の国が参加するものが「国際」と認定されるくらいなので、これこそ本格的な国際会議といえるでしょう。

テーマは、「日中韓シンポジウム 東アジアにおける人と自然の相互作用の多元的アプローチ」（中国訳「中、日、韓学術論壇『東亜文化与民族、宗教』」）というものです。これは人間と自然の相互作用を「自然と文化の重層的関係」という斬新な視点でとらえ、日本およびアジアにおける人と自然の相互作用を多元的な視点で解明することをめざすもので、日本・中国・韓国の 3 地域の研究者を交え、各国の自然観にかかわる諸事象、諸原理への接近を目指して研究発表が行われました。

このシンポジウムは中国国立華僑大学と人間文化研究機構「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」サブ研究グループ「生き物供養から見る自然観の変遷」・総合研究大学院大学「戦略的共同研究支援事業」「観相資料の文学的研究」・日本学術振興会基盤研究（A）「和漢古典学のオントロジモデルの高次・具現化」・総合研究大学院大学文化科学研究科学生派遣事業との共同主催により行われました。折しも日本の横浜・中国の泉州・韓国の光州を東アジア国際文化都市とする協定が、会議 1 週間前の 8 月 26 日に締結されたばかりで、このシンポジウムはそれを記念するイベントとしても扱われました。6 社を超える新聞社や放送局による大々的な取材を受け、泉州市では、シンポジウム終了後 2-3 日も経たない内に、40 本以上ものホームページや新聞記事が発信・掲載されたほどでした。

この「東アジア文化都市」は日中韓 3 国において文化芸術による発展を目指す都市を選定し、各都市において様々な文化イベント等を実施することで、東アジア域内の相互理解・連帯感の形成を促進して多様な文化の国際発信力の強化を図ることを目指すものです。そうした記念すべき会に、総合研究大学院大学在学学生の高野（屋代）純子「田山花袋の翻訳・翻案作品における「自然」表現について」や本館の相田満が「生き物供養から見る自然観の変遷」などの発表を行いました。日本人の万霊供養的な自然観が中国・韓国には無かったことなので、このことは大きな問題意識として受け止められ、今後の活発な交流が期待される意義深い会となりました。

西安・泉州両市とも、日本人の数は少なかったものの、市内の雰囲気はいずれも昨年の様子とは打って変わって実に和やかでのんびりしたものでした。特に泉州市には大きな二宮金次郎像があるなど、歴史の古さと日中の友好関係を感じられた町並みは印象深いものでした。

（相田 満）



西北大学図書館にて



華僑大学シンポジウムにて



泉州市街の二宮金次郎像

EAJRS（日本資料専門家欧州協会）研究集会

平成25年9月18日から21日に、日本資料専門家欧州協会（European Association of Japanese Resource Specialists）第24回研究集会¹がフランスで開催されました。EAJRSは、欧州における日本資料専門家の組織で、欧州内、日欧間での情報共有等を目的として活動しています。一年に一度開催される研究大会には、当館もほぼ毎年参加しており、日本古典籍総合目録データベースの目録規則、各種データベース公開の報告など、多数の事業を紹介してきました。

今大会は、パリの「Bibliothèque Universitaire des Langues et Civilisations（大学間共同言語文化図書館：BULAC）」を会場とし、19か国95名が参加しました。北米からも7名の参加があり、日本からは国立国会図書館、国立情報学研究所、国際日本文化研究センターなどから27名が参加しました。

4日間で9セッション42本の口頭発表、国立情報学研究所のワークショップ、国立国会図書館等のハンズオンセッションに加え、ギメ東洋美術館図書館、BULAC図書館での資料見学が行われるという充実したプログラムでした。発表内容は多岐に渡り、各機関が所蔵する日本資料の紹介と研究発表、資料の公開・管理方法の紹介のほか、複数の機関が共同で行う資料情報共有の取り組みについての報告、日本資料専門家としての研修に関する報告などがありました。

資料紹介と研究発表では、日本文学に関連する資料のみならず、歴史資料、美術品、民俗資料なども多く取り上げられており、各地で「日本資料」として扱われる資料の多様さが反映されていました。資料情報共有に関しては、北米からHathiTrust²とNCC（North American Coordinating Council on Japanese Library Resources；北米日本研究資料調整協議会）³の活動が紹介されました。発表では改めて協力が呼びかけられたほか、著作権に関するガイド機能の強化や今後の展望が報告されました。

当館からは「国文学研究資料館における電子画像提供サービスの紹介」と題し、所蔵和古書・マイクロ／デジタル目録データベースと、近代書誌・近代画像データベースの紹介を太田が行いました。会場からは、システムの操作方法、画像の印刷や複写に関する実務的な質問、マイクロフィルムのデジタル化と画像公開の拡充への要望が寄せられました。

今や、大規模な機関での所蔵資料デジタル化・公開は珍しくありません。複数の機関によるデジタル化資料の共有も盛んに行われています。しかし、そのような資料情報の共有において、社寺・個人の文庫を含む387機関の資料画像と書誌を集積する当館は、他には果たし難い役割を担い、また期待されていることを強く感じました。他機関の取り組みや、資料研究に関する情報を得ることで、今後もより充実した事業を進められればと改めて考える機会となりました。

（情報サービス第1係 太田 あす香）



「ギメ東洋美術館」図書室での資料見学の様子



発表風景

¹ EAJRS. "EAJRS 2013 Paris Conference | EAJRS". European Association of Japanese Resource Specialists 日本資料専門家欧州協会. <http://eajrs.net/>. (参照 2013-11-25).

² HathiTrust. "HATHITRUST Digital Library". HathiTrust Digital Library|Millions of books online. <http://www.hathitrust.org/>. (参照 2013-11-25). 米国の大学図書館等が共同で運営しているデジタル化資料のリポジトリです。人文科学分野の資料も多数登録されています。

³ North American Coordinating Council on Japanese Library Resources. "Homepage - North American Coordinating Council on Japanese Library Resources(NCC)". YOUR GUIDE TO JAPANESE LIBRARY AND INFORMATION RESOURCES. <http://guides.nccjapan.org/homepage>. (参照 2013-11-25).

なお、NCCのウェブサイト内にある「日本研究のためのMLAアクセスガイド」ページには、当館の紹介、閲覧室の利用方法、いくつかのデータベースの概要が英語でまとめられています。<http://guides.nccjapan.org/content.php?pid=245543&sid=2028359> (参照 2013-11-25).

平成 25 年度国文学研究資料館「古典の日」講演会

11月1日（金）に東京都千代田区の「ベルサール神田」において国文学研究資料館「古典の日」講演会が行われました。「古典の日」は、古典が我が国の文化において重要な位置を占め、優れた価値を有していることに鑑み、国民が広く古典に親しむことを目的として、平成24年3月に法制化されました。11月1日は、我が国の代表的な古典作品である『源氏物語』の成立に関して、最も古い日時が寛弘五（1008）年11月1日であることからこの日に定められました。日本古典文学の文献資料収集と研究を主事業とする国文学研究資料館も、この「古典の日」の趣旨に賛同し、法制化された昨年度から記念の講演会を催しております。

今回は、昨年度の応募者盛況に応じて会場を千代田区のイベントホールに移し、「リンボウ先生」こと作家・国文学者・書誌学者の林望先生を講師にお招きしました。12時30分の開場は30分繰り上がって12時からとなり、会場は300人を越す聴衆の熱気に包まれました。

今西祐一郎国文学研究資料館館長の挨拶にはじまり、まず、当館の山下則子教授が「<風流・やつし>と<見立て>」という題で講演され、「風流・やつし」と「見立て」の違いを、色鮮やかな浮世絵などの図版を駆使して明快に解説されました。次いで林先生が「源氏物語を読むこと、訳すこと」という題でお話をされました。後半には、林先生の『謹訳 源氏物語』の一節が読み上げられ、源氏物語の雰囲気を見事にすくい取った名訳に、会場から一斉に拍手がわき上がりました。

講演終了後は、林先生の「サイン会」が催され、大盛況の内に「古典の日」は終了しました。

（田中 大士）



「風流・やつし」と「見立て」の違いを解説される山下則子先生



「源氏物語」の名訳を熱演される林望先生

『HUMAN——知の森へのいざない』 第5号

■人間文化研究機構監修

『HUMAN——知の森へのいざない』 vol.05

平凡社、2013年12月4日刊、定価1575円

「古事記」「万葉集」にも登場する酒は、日本の文学に通底する題材です。本号は「酒と日本文化」を特集し、石毛直道・国立民族学博物館名誉教授が民俗学者の神崎宣武・旅の文化研究所所長と日本の酒について縦横に語り、「酒と俳諧」をふくめて、多分野の方々が古代から現代にいたる酒造・飲酒の様相について執筆しています。また、展示・コレクションの紹介コーナーでは、当館の落合博志教授が「国文学研究資料館の古典籍コレクションと本の展示」と題して「和書のさまざま」展の内容などを記しています。



企画展示「渋沢敬三からのメッセージ」「周流する記録」を振り返る

2013年は渋沢敬三氏の没後50年の年にあたります。これを機に「渋沢敬三記念事業」が立ち上がり、敬三に関する企画展や講演会・シンポジウムなどが各地で開催されています。渋沢敬三は、実業家として著名な渋沢栄一の嫡孫であり、日本銀行総裁、戦後の大蔵大臣をつとめた経済人であると共に、民俗学、民族学をはじめとする日本の文化事業の発展に大きく貢献した人物です。

当館と敬三との関わりは深く、当館の前身にあたる文部省史料館の設立の際に出された国会への「史料館設置に関する請願」（昭和24年3月）には敬三の署名が記されています。史料館設立後の昭和27年から昭和38年の12年間は、文部省史料館評議員も務めました。また、敬三が設立を目指した「日本実業史博物館」の資料は一括寄託の後、昭和37年に当館へ寄贈となり現在に至っています。

没後50年にあたる本年、「渋沢敬三からのメッセージ」展（開催日程：平成25年9月13日～10月14日）、「周流する記録」展（開催日程：平成25年10月18日～10月22日）が、「渋沢敬三記念事業」における研究プロジェクト成果公開の一環として、一般財団法人MRAハウスの助成を得て開催されました。

・渋沢敬三からのメッセージ展

本展は、渋沢栄一の没後に出された「渋沢青淵翁記念室」「近世経済史展覧室」「肖像室」からなる「青淵翁記念日本実業博物館」（近世経済史博物館、のち日本実業史博物館）の構想に基づいた、“渋沢栄一「青淵翁記念室」の復元×（バーサス）渋沢敬三の夢みた世界”の二部構成です。敬三が中心となり準備が進められた「青淵翁記念日本実業博物館」（日本実業史博物館）は、地鎮祭は挙行されましたが、戦時経済統制の強まりにより竣工には至らず、開館は叶いませんでした。本展は日本実業史博物館旧蔵資料を対象に行った資料データベース構築の成果に基づいてその再現を試みたものです。

青淵とは、渋沢栄一の雅号です。「青淵翁記念室」は、昭和12年に敬三により執筆された「一つの提案」で、渋沢栄一その人すべてを表現するため、以下の展示方針が示されています。“青淵翁の一代を遺品、写真、絵画、図表などを成可く効果的に応用して如実に一日是れを知る一つの記念室であります。従而此の室に関する限り青淵翁一生の序次にならひ、経済以外の事項即ち教育、国際親善、労働問題、社会事業等凡てを網羅することゝなるのであります。”これを受け、当館所蔵の渋沢栄一の遺品調査を行い、「青淵翁 御所用品目録 御収蔵品目録」（昭和21年）記載の170点と、「日本実業史博物館準備室旧蔵資料器物の部」26点を抽出し、ほぼ全点を展示公開しました。当館でも初の試みになります。

「渋沢敬三の夢みた世界」では、“理論づける前にまず総てものの実体を掴むことが大切”とし、自らを“学者ではなく一実業人”と位置づけ、学問の発展のため資料の公開に尽力した敬三に着目しました。展示資料は、文部省史料館の設立に関する記録、日本実業史博物館設立準備室アーカイブズ、全国各地から収集した水産史料と公文書、国文学研究資料館に遺されたアチックミュージアム資料などです。また、敬三が横浜正金銀行ロンドン支店勤務の際に訪れたスウェーデンのスカンセンミュージアムは、日本民族博物館の設立のきっかけにもなりました。狛江市より移築された国営昭和記念公園の「こもれびの里」の旧石井家住宅を対象に、敬三が目指した現代版「回遊展示」を国営昭和記念公園、立川市、狛江市との共催で企画しました。更に、「渋沢敬三からのメッセージ」展の関連行事として開催されたシンポジウム“渋沢敬三が夢みた世界－没後50年企画”では、これまでの研究成果を基に、日本実業史博物館をはじめとするコレクションをいかに未来に継承し、次代の研究基盤を築き上げていくかという視点で報告がなされました。

・「周流する記録」展

2003年に長野県中野市の旧家・山田家の調査の際、渋紙（柿渋を紙に塗り敷紙などに用いたもの）から発見された台湾文書と明治期の日本文書を初公開しました。渋紙から剥離・修復・復元された紙片（史料断片）496枚のうち、台湾文書は200枚余りです。台湾文書は、19世紀清朝時代に書かれた地方役所の文書であることが台湾史の専門家の調べで明らかとなりました。地租支払命令書や塩の交易に関する文書などで、これら地方役所の文書はほとんど伝残せず、貴重な史料であると評価されています。



（中野市教育委員会寄託・東江部村山田庄左衛門家文書）

祖父栄一の跡継ぎとして実業家となり、混迷な時代を駆け抜けた敬三は、“資料を学界に紹介・提供すること、そのための努力をする研究者の仕事を援助する・実現する”ことによって、叶わなかった自らの夢を育ててきたのでしょうか。資料にこめられた敬三からのメッセージを、本展を通して皆様にお伝えできましたら幸いです。

（高科 真紀）



連続講座 「くずし字で読む『源氏物語』」

昨年に引き続き、今西館長による、『源氏物語』でくずし字を学ぶ講座が開催されました。今年度は会場として大会議室をご用意したにもかかわらず、定員をはるかに上回るご応募をいただき、毎回100名前後の方が受講されました。

講座はまず、かなの成立に関する説明、つづいてくずし字の解説、『源氏物語』桐壺巻について四種の諸本の紹介がなされました。そして毎回、当館所蔵の江戸前期刊絵入本を用いて各巻冒頭部を若紫巻まで読み進めました。くずし字ごとの微妙な相違を語る館長の語り口が受講者の皆さまに喜ばれていました。なかにはくずし字をすでに習得されている方もいて、館長の問いかけにすぐに会場から答えが返ってくるなど、終始、熱心に楽しまれている様子でした。

最後に、古典をできるだけ多く声に出して読むことがくずし字上達の秘訣と明かされ、講座が締めくくられました。受講者の皆さまからたいへんご好評をいただき、手応えを感じております。

(野網 摩利子)

開催期間：平成25年10月2日、9日、23日、11月6日

講師：今西祐一郎館長

テキスト：『源氏物語』承応三(1654)年、八尾勘兵衛刊。54冊。絵入本。請求記号、サ4-26。なお、この資料は全冊カラーデジタル画像を当館ホームページにて公開しており、どなたでもご覧になれます。



連続講座風景

大学共同利用機関シンポジウム2013「万物は流転する」

11月16日(土)に、東京国際フォーラムにおいて、当館を含む大学共同利用機関によるシンポジウム「万物は流転する—因果と時間」が開催されました。大学共同利用機関とは、個別の大学では維持困難な大規模設備や膨大な資料・情報などを国内外の大学や研究機関に提供し、効果的な共同研究を実施する我が国の中核的研究拠点です。

今回は、「万物は流転する—因果と時間」をテーマに、下記の四つの講演が行われました。

(田中 大士)

1. ニュートリノ振動実験
—この世で最も小さな粒子を探る、この世で最も大きな実験—
高エネルギー加速器研究機構 素粒子原子核研究所 助教 多田将氏
2. 時間をさかのぼる推理
—ゲノム解析から明らかになる私たちの起源—
情報・システム研究機構 統計数理研究所 准教授 間野修平氏
3. 『曾根崎心中』の因果応報 —作者近松はなぜ残酷になるのか—
人間文化研究機構 国文学研究資料館 名誉教授 武井協三氏
4. 法則と予測 —過去・現在・予測・そして未来—
自然科学研究機構 核融合科学研究所 教授 伊藤公孝氏



総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

・入試説明会と特別講義

日本文学研究専攻は、10月26日（土）に平成26年度の入試説明会を行いました。この日はあいにく台風接近による交通機関の乱れが予想され、参加者数は伸びませんでした。例年通り開催いたしました。特別講義は、総研大の「国際的視野を持った研究者養成のための多面的国際交流事業の展開」の予算でイギリス研修に行った野網摩利子国文研助教による「漱石と英国史」でした。

・総合研究大学院大学創立25周年記念事業

総合研究大学院大学が日本で初めての大学院大学として誕生してから、今年で25年がたちました。11月25日（月）～26日（火）に創立25周年記念事業として、総研大葉山本部で「はじまり」シンポジウムが、湘南国際村センターで記念式典祝賀会が開催されました。記念式典・祝賀会では秋篠宮殿下のご臨席を賜り、盛会のうちに終了しました。



・「国際的視野を持った研究者養成のための多面的国際交流事業の展開」報告

野網 摩利子

平成25年4月25日～5月27日、総研大による若手教員海外派遣事業により、イギリスで研修しました。研究題目は「夏目漱石によるヨーロッパ思想の受容に関する研究」、受入機関はロンドン大学アジア・アフリカ校（SOAS）で、受入研究者はスティーブン・ドッド（Stephen Dodd）先生でした。得られた研究成果は、イングランド・スコットランド間の抗争史と文学との関係について、漱石の着眼点が明確になったこと、デイヴィッド・ヒュームやトーマス・カーライルなどのスコットランドの哲学・思想を漱石がどのように受けとめたかについて研究できたこと、ヨーロッパ大陸の宗教闘争と密接な関係にある、16～17世紀のイギリス宗教史に対する漱石の持続的関心について調査しえたことです。このように歴史・思想との関わりのなかで漱石が文学についての考察を深めていったことが、現地研修により判明いたしました。貴重な機会を与えて下さった関係各位に、深く感謝します。

2月							3月							4月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
						1							1			1	2	3	4	5
2	3	4	5	6	7	8	2	3	4	5	6	7	8	6	7	8	9	10	11	12
9	10	11	12	13	14	15	9	10	11	12	13	14	15	13	14	15	16	17	18	19
16	17	18	19	20	21	22	16	17	18	19	20	21	22	20	21	22	23	24	25	26
23	24	25	26	27	28		23	24	25	26	27	28	29	27	28	29	30			
							30	31												

- 開館 9:30～18:00 ●請求受付 9:30～12:00 13:00～17:00 ●複写受付 9:30～16:00
- ただし、土曜開館日は、
- 開館 9:30～17:00 ●請求受付 9:30～12:00 13:00～16:00 ●複写受付 9:30～15:00

表紙絵資料紹介

『狂言絵』より「仁王」 (当館蔵 請求番号 99-187-1-60)

全60紙。狂言の一場面(60曲)を彩色で描き、裏には曲名と番号が墨書される。一紙の寸法は、縦234糎×横343糎(「夷毘沙門」の場合)。帙の外題等から元は六曲一雙の屏風に貼られていたことが知られる。伝来は未詳。掲載した「仁王」は、シテが上半身裸で描かれており、他にあまり見られない図柄である。

描かれた狂言の流儀は特定できず、江戸初期に南都禰宜衆の上演記録がある「六人僧」を収め、『狂言記』『狂言記外』『続狂言記』『狂言記拾遺』に所収される曲目や曲名表記と重なることから、南都禰宜衆や京都で活躍した群小猿楽集団の演目を絵画化した可能性が考えられる。製作時期は江戸前期頃と見てよく、当時の狂言の舞台を反映したまとまった絵画資料として貴重である。



(小林健二)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町10-3
 Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成26年(2014)1月24日
 編集 国文学研究資料館広報出版室
 印刷所 三鈴印刷株式会社
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館